

# 死ぬ朝は野無季にあかがねの鐘鳴らむ

藤田湘子

昔の野辺送りの銅鑼の音が聞こえてきた。まだ土葬が行われていた頃、親戚縁者、隣組総出で墓地まで柩を担いでいった、あの葬列の鐘の音である。

「あかがねの鐘」は、湘子が志した俳句そのものを悼む、湘子自身の、俳句への弔鐘なのではないかと思う。

「無季」という前書がクローズアップされ、湘子も、死の直前には、無季の句を容認したようにも受け取られている節があるが、私は違和感を禁じ得ない。あの厳しい湘子である。推敲のための覚書であつたような気が今でもしている。少なくとも、無季の句として発表するための但し書きではなかったのでは、と私は考えている。

本人に問えない以上、永遠の謎である。

2005年 (h17作) 第十一句集『てんてん』 鑑賞・野本京